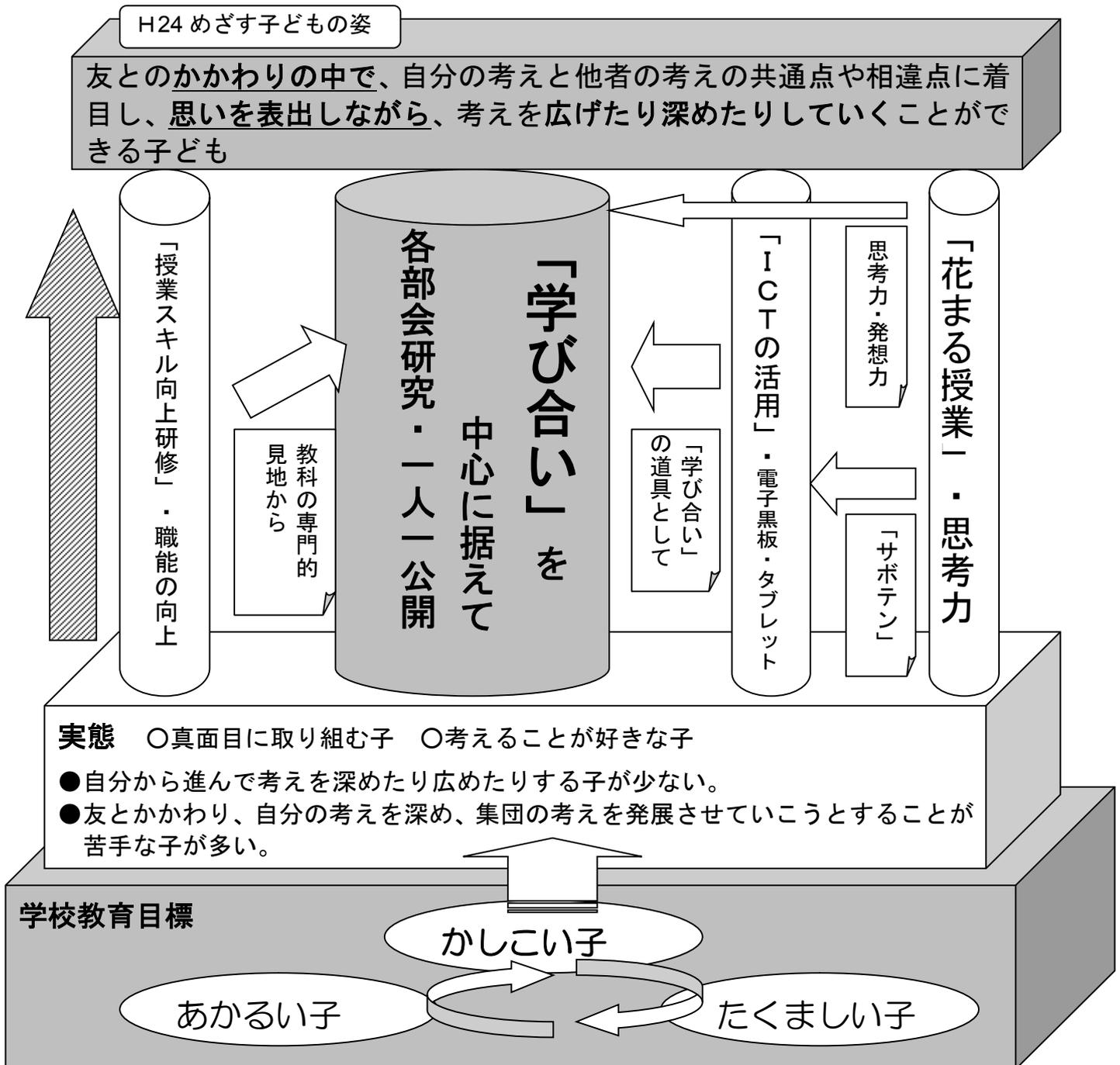


H24 年度研究の概要（まとめ）

I 「学び合い」をデザインする

1 H24 の研究の歩み



2 1時間の「学び合い」のデザイン（成果）

はじめ

① 課題設定に時間をかけない。

（今日のゴールが分かる。）

- ・素早い課題設定。・活動の時間を十分にとる。

② 学び合いの「タネ」をまく

（「〇〇したい」気持ちが生まれる『しかけ』）

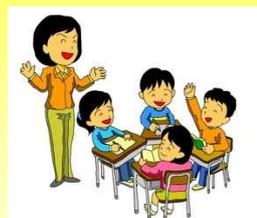
- ・子どもの中に「〇〇したい」気持ちを生み出す。
- ・「学び合い」の必要感を持たせる。「友とかかわりたい。」

なか

③ 「学び合い」の前は目的を持って

（「話したい」「困った」ときに、気軽に）

- ・何のために（発表練習、情報交換、話し合い）
- ・いつ？（ア計画的 イ必要感に根差して）
- ・ペアか、グループか（3人、4人、5人）
- ・様子を机間指導でみとり、全体追究にいかす。



④ 全体での「学び合い」

（交流する中で、自分の考えを捉えなおしていく）

- ・話しあう内容を絞りきる。
- ・子どもの言葉を「待つ」「聴く」、子どもたちを「つなぐ」、学びを深める「問い返し」
- ・本時の到達点に向かう舵取り。（机間指導を生かして意図的指名）

おわり

⑤ 一人に還る

（学びを自覚し、自分と友の姿を振り返る）

- ・学習問題について振り返る。（最初の自分と比べて）
- ・自分の学び方を振り返る。
- ・友の学び方を振り返る。



3 「学び合い」の成果（「研究まとめの会 H25.2.27」から）

〈成果〉

- 低学年における国語科での学び合いを創り出すために、「しかけ（大きなしかけと小さなしかけ）」「タネ」「つなぐ（学習形態と教師の出）」等が、大変重要になってくることがわかってきた。（低学年部会）
- 中学年で習得したい国語の力のキーワードは「対比」。主人公と自分の考えや、友と自分の考えを比較することができた。
- 「音読対話」により、友とかかわりながら文章を正確に読もうとする意識が高まった。（中学年部会）
- 学び合いの道筋や授業構想がはっきりしてきた。
- 国語、算数、音楽の授業それぞれに授業構想が有効に活用できた。
- ペア、グループ、全体等の多様な形態の学び合いが必要に応じて効果的に用いることができた。（高学年部会）

〈課題〉

- ☆子どもたちと対応しながら、どのような場面でどのように教師は出たらよいか、マニュアルはないので、大変難しい課題として残った。
- ☆教材研究をもとにつけたい力を明確にし、学習課題で言語に焦点をあてて絞り込んでおくと、学び合いが深まり、つけたい力に近づけることができる。

4 「学び合い」のデザインを超えて

平成 24 年度の研究を通して、「学び合い」の道筋が見えてきた。これは、一人一公開を通して全員が授業をする中で見えてきた、具体の姿から導き出された成果である。今後も子どもたちを真ん中に置いて、教師主導型の授業を脱し、子どもたちが学びの主役となる「学び合い」の授業を積み重ねていきたい。そのうえで、以下の 3 点を心に留めておきたい。

- (1) あくまで、全体追究に向かうためのグループ学習である。ただグループにして活動させれば、「学び合い」になるわけではない。なぜ、グループにするのか？グループ学習で何を指すのかを意図したい。（子どもの「困り感」からスタートする。）
- (2) 「学び合いの授業デザイン」は一つのイメージである。この型を超えて『学び合い』を進めていかなければならない。「話し合い、学び合う」1 時間もあれば、課題を設定する 1 時間もある。「困り感」がなければ、「学び合い」は成立しない。極論すれば、単元の中に「学び合い」でない 1 時間もある。大切なのは、「学び合い」を常に教師が意識していることである。そうすることで「学び合い」のない単元は生まれない。その都度、柔軟に授業デザインは変化していく。
- (3) 「わからない」と言える学級づくりが、「学び合い」の根幹を支える。何でも話せる学級であれば、安心して学べ、話し合える。授業づくりは、「学級づくり」である。まず、教師が、子どもが発する言葉を丸ごと受け止めたい。そして、一人ひとりが、「聞く」ことができる学級を作りたい。

Ⅱ 3 学期具体の姿から（「学び合う」子どもの姿と教師の姿勢）

～先生方より学ばせて頂いたこと～

（1）1-2 の授業から

○「しかけ」を用いた体験的学習の事例（動作化で気持ちを表出する子ども）

T「今日は、その場面のタヌキの気持ち（を考えてみよう）」

糸車登場

やりたい子が次々に挙手して、たぬきを演じていく。

S児：糸車が動く様子をじっと見ている。

N児「面白そう」

T「なんでそういったの？」

N児「面白そうだから」

T児「面白そう。」

T「なんで？」

T児「形がちょっと面白いから」※面白い理由が変化
子どもたちの挙手が増え、クラス全体に広がっていく。

W児「糸つむぎたいなー」

T「みんな聞こえた？なんて言った」※キーワードに焦点化する教師の出。

W「くるくる回っているから、面白そう。」

T「みんなWさん、表情も違ったの。ニコニコ笑ってじゃなくて…」

E児「あっ、真似してたの？」

T「どういうこと？」

E児「くるくる回ってたところ」※叙述に注目し始める子どもたち。



実際に糸車と障子を準備して、障子の陰からのぞきこみながら動作化したことで、子どもたちが物語の世界に入り込み、表情まで変化させて演じることにつながった。S児は、糸車が登場してからずっと糸車の様子に見入っている。授業の後半で自分も手を挙げ始めた。また、他の子が演じる姿を見て、全員の注意が集中し、次々に物語の世界に浸っていった。

さらに、演じる子どもに対して、その小さな表情や言葉の変化をみとり、「なぜ？」「どうして」「どんな感じ」と問い返すことで、教科書の叙述に気づかせていくことにつながっている。

見えてきた「学び合い」の『鍵』

○場の工夫が大切。いきた「しかけ」となって、子どもを動かす。

○目的に沿った「教師の出」が、子どもたちの学び合いを方向づける。

（2）2-2 の授業から…①②

○「学び合い」は、いつ成立するか？（「学び合い」のタネをまく）

終末の場面で…

T「今日のおにごっこクイズをやった感想を書いてください。発表してください。」

M児「ちゃんと作れてよかったです。つくるのが楽しかったです。ヒントとか作れてよかったです。」

Y児「楽しくやらしてもらってうれしかった。みんなが分かるように作れてよかった。」

T「今日は、みんなが分かるようにという目標だったね。この感想は素晴らしいね。」

授業の終末で、子どもの感想に対する「教師の出」の場面である。本時のねらいに沿った（学習課題にあった）感想を取り上げて、子どもたちの前で認めている。日々のこういった「教師の出」が、次の他の子どもたちの学び方を育てていくと考えられる。他の子どもが、次の学習で感想にどんなことを書けばよいか分かるだろう。目的に沿って振り返るのである。

それ故に、スタート時の学習課題が大切になってくる。自分達は今日何を学ぶのかを子どもに自覚させなければならない。それには、子どもたち自身



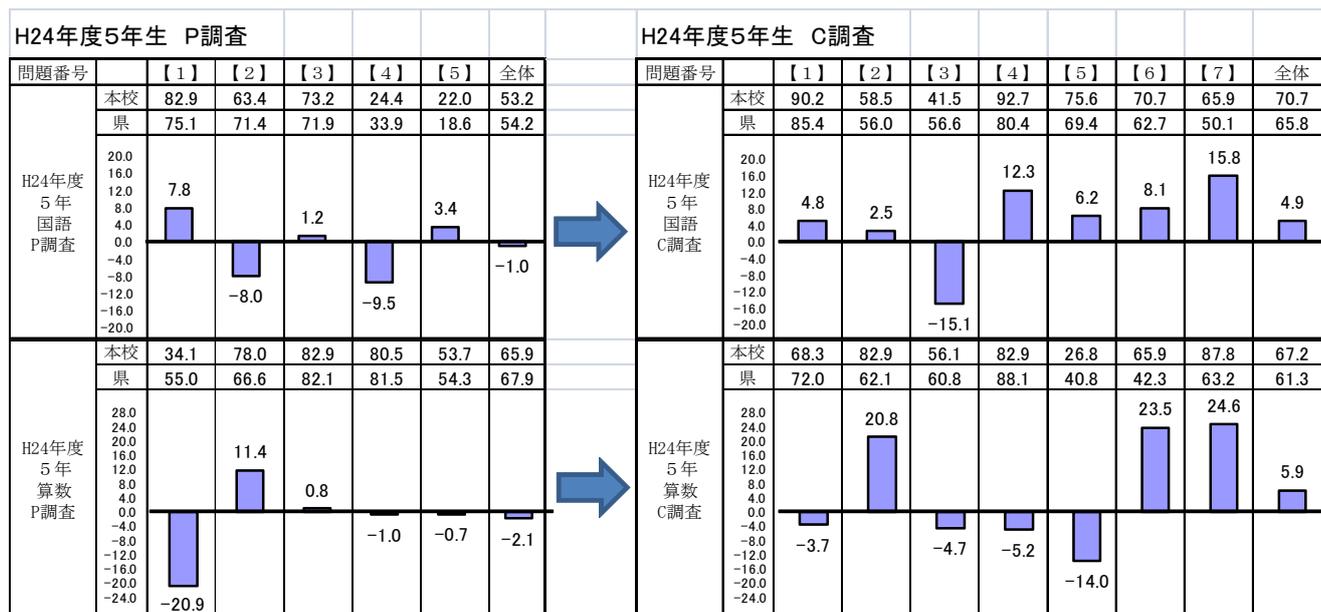
が、授業の最初で失敗したり、迷ったりする「困り感」を感じる場面が必要である。困った時に初めて、友達に聞いてみたくなり、自然とかかわりが生まれるからである。子どもたちを「学び合い」に導く「しかけ」が必要になってくる。

そうすると、さらに上記M児は、「ちゃんと」の中身が書けるようになるのではないか。（「分かりやすく順番に」など）

見えてきた「学び合い」の『鍵』
○「困り感」から、「学び合い」がスタートする。

Ⅲ 終わりに

以上の一年間の試みが、各種調査結果から「見える学力」として、どのように表れてきているのか見てみたい。（今年度 PDCA の結果）



PDCA 事業では、小5の国語、算数ともに春に比べて向上している。また国語だけでなく、小4算数の結果でも、P調査からC調査での向上が見られた。また、同様に6年の全国学力調査でも、全国平均を上回る結果を得られた。特に「国語と算数が好き」と答えた児童が8割と、「関心・意欲」の高さが「学力」の向上を支えていることが明らかになった。

本校では、友との言語活動を通じた「学び合い」を大事にして授業を行ってきた。話すときには、知識を活用し話し、時と場を考えて話し、相手の表情を見て、言葉を選んで話すことが自然に行われている。そのことで、既習知識が、多角度から見直され、自分の頭の中で再構成され、再定義され、定着しているものとする。

また、年度末に行われたCRTでは、全学年で国語「聞くこと」について、全国平均を上回った。「聞くこと」の大切さが、低学年から繰り返し指導された成果と考える。

今年度進めてきた1時間の授業の「学び合い」の活動が、子どもたち同士の活発な言語活動を生み、言語活動を通して学力の定着が進んでいることが明らかになった。

現在、全学級で子どもたちから「学び」が生まれる授業を意識して授業が行われている。今年度の研究を通して、「学び合い」を中心に授業をつくり、積み重ねることで「学力」が伸びていくことが明らかになった。今後は、この「学び合いのデザイン」を超えて、さらに各授業者が自分の色を付けていくことが求められている。「学び合い」の型は一つではないと考える。さらに試行錯誤を重ねていくことで、子どもたちと共に我々も伸びていくのである。

今年度の研究を進めてくるにあたり、東信教育事務所指導主事の三ツ井邦仁先生、信州大学教育学部教授藤森裕治先生（国語）、小松孝太郎先生（算数）にご指導をいただき、研究の方向について示唆していただいた。ここに記した研究成果は、本校職員の不断努力とお二人の先生方のご指導によるものである。改めて感謝したい。

（研究推進係）